FUTURE!

2023年度

こども応援金報告書

未来をひらく

こども応援金

Kodomo ōen-kin

◆児童養護施設・里親家庭等進学応援金

◆自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金

◆災害時こども福祉応援金

社会福祉法人
朝日新聞厚生文化事業団

お 礼

私たちは2008年に児童養護施設や里親家庭の高校生の大学などへの進学支援を開始し、11年の東日本大震災では両親を亡くした子どもたちへの応援金、20年には新型コロナウイルス緊急学生応援金を実施するなど、困難な状況にある子どもや若者のための「こども応援金」をおくってきました。

23年度は、児童養護施設などで暮らすのべ635人の子ども、若者に総額8237万9415円の学びのための応援金をおくったほか、地震や大雨で被災した里親家庭9軒に合計130万円の支援金をお届けすることができました※1。

このように子どもたちを支援できるのは、ご寄付をくださるみなさまのおかげです。誠にありがとうございます。

朝日新聞厚生文化事業団では、みなさまの思いをもとに、子どもたちの希望ある未来を拓くとともに、社会に思いやりの輪が広がることを願いながら、これからもこども応援金プロジェクトに取り組んでまいります。

今後とも、ご支援、ご声援をいただけますよう、どうぞよろしくお願いいたします。

結びになりますが、こども応援金は、プロジェクトに共感してくださる多くの福祉団体、企業、学校、社会的養護で育った若者や養育者、専門家などにも支えていただいています。多くの方のご協力に、あらためて感謝を申し上げます。

朝日新聞厚生文化事業団

※1　23年度決定分として24年9月に送金する奨学金を含みます

※ これまでの報告書は、給付型奨学金の種類ごとに制作してきましたが、様々な取り組み、子どもたちの状況などをみなさまにご報告させていただきたく、こども応援金として一冊にまとめて発行いたしました

2023年度
3事業へのご寄付の状況

2023年度も多くのみなさまから温かいご支援をいただきました。厚く御礼申し上げます。

3事業の寄付額は総計1842万8336円（783件）となりました。以下、内訳をご報告します。

「児童養護施設・里親家庭等進学応援金」は1002万6205円（375件）、「自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金」は650万2161円（278件）、「災害時こども福祉応援金」（能登半島地震）は190万円（130件）です。

朝日新聞厚生文化事業団への直接のご寄付のほか、クラウドファンディングサイトREADYFORを通じてもたくさんのご支援をいただきました。

困難な状況にある子どもたちの未来のため、大切に活用させていただきます。

児童養護施設・里親家庭等進学応援金

ご寄付の種別	寄付件数	寄付金額
READYFOR（クラウドファンディング）	198件	**3,831,500円**
朝日新聞厚生文化事業団への直接のご寄付	177件	**6,194,705円**
合計	375件	**10,026,205円**

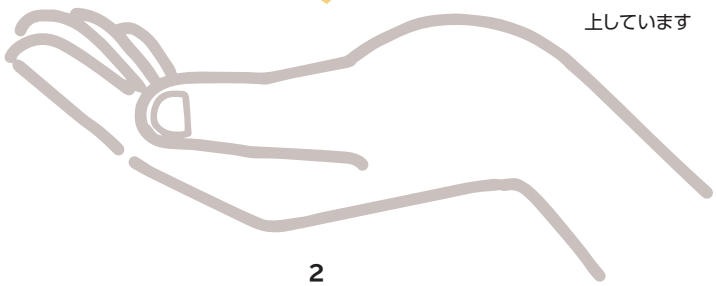
自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金

ご寄付の種別	寄付件数	寄付金額
READYFOR（クラウドファンディング）	193件	**3,623,500円**
朝日新聞厚生文化事業団への直接のご寄付	85件	**2,878,661円**
合計	278件	**6,502,161円**

災害時こども福祉応援金

ご寄付の種別	寄付件数	寄付金額
能登半島地震	130件	**1,900,000円**

※「こども応援金（一任）」でいただいたご寄付は、進学応援金、まなび応援金に案分して計上しています



大学や専門学校で学ぶ私たちから寄付者のみなさんへ！

患者を支える看護師に

演習や実習の多い看護学部で学んでいます。病院には免疫力の落ちた患者さんも少なくなく、感染症対策のため、看護学生は実習中にアルバイトができません。不安を抱えていましたが、応援金のおかげで学びや実習に集中した生活を送れています。みなさまの応援を忘れず、患者さんを支えられる看護師になれるよう頑張ります。

（ケイコ・20歳）

商品開発の仕事頑張る

応援金のご支援、本当にありがとうございました。大学の4年間でたくさん学び、充実した学生生活を送ることができました。卒業後は食品会社で商品開発の仕事に就く予定です。多くのみなさまから応援いただいたことを胸に、今後も社会人として恥ずかしくないよう頑張っていくつもりです。

（カナ・22歳）

ご寄付と応援

大きな財産を得られた

アルバイトをしながら旅行することにハマっています。大学に入学し、授業以外にも興味を持てるものがあると知りました。かけがえのない出会いもたくさん経験できました。寄付で応援して下さるみなさんのおかげです。自分にとって、大きな財産を得られる機会を与えていただき、本当にありがとうございます。

（シンジ・21歳）

学びつつ五つのバイト

大学の放課後や休みの日に、居酒屋など五つのバイトを掛け持ちしています。疲れは溜まりますが、働くことは苦痛ではありません。単位も取れ、友人にも恵まれています。私が「普通」の生活を送れているのは、みなさまのご支援があるからこそです。これからも勉強やアルバイトに励み、応援に応えられるよう力を尽くします。

（サチヨ・20歳）

Hope

Dream!

デザイナーの道目指す

大学に通いながら会社で働き、デザインを学んでいます。卒業後はデザインに関わる仕事に就きたいです。応援金がなければ進学は困難でした。大学に進めなかったら、デザインにも触れられず、この道は将来の選択肢になかったと思います。応援して下さるみなさまに感謝しています。自分としっかり向き合い、頑張ります。

（タケル・21歳）

出身施設の分園に就職

みなさまのおかげで大学に通え、無事卒業することができました。以前、自分が暮らした施設の分園に就職します。もともと、自分のような施設で育つ子どもたちのために働きたいと進学を希望していました。その夢が叶うことをとても嬉しく感じています。応援して下さり、本当にありがとうございました。

（アカネ・22歳）

ありがとうございます！

経験と知識増やしたい

幼稚園教諭、保育士に加え、社会福祉士の資格所得も目指し、日々勉強しています。多くのことに興味があり、自分が将来何をしたいか、まだ一つに絞り切れていません。様々なことに挑戦し、経験と知識を増やしていきたいと思っています。みなさまのご支援で、将来につながる学びを得られています。前向きに頑張っていきます。

（カズミ・20歳）

福祉分野への就職目標

大学では児童について学んでいます。将来は児童養護施設や一時保護所など福祉の分野で働きたいと考えているからです。夕方から深夜までコンビニでアルバイトをしています。趣味は音楽を聴いたり、スマホで映画やアニメを見たりすること。時間が足りません。こうした学生生活を送れるのも、寄付して下さるみなさまのおかげです。

（ソウタ・19歳）

※名前は仮名。年齢はメッセージ作成時点。今春の卒業生含む

2023年度の給付報告

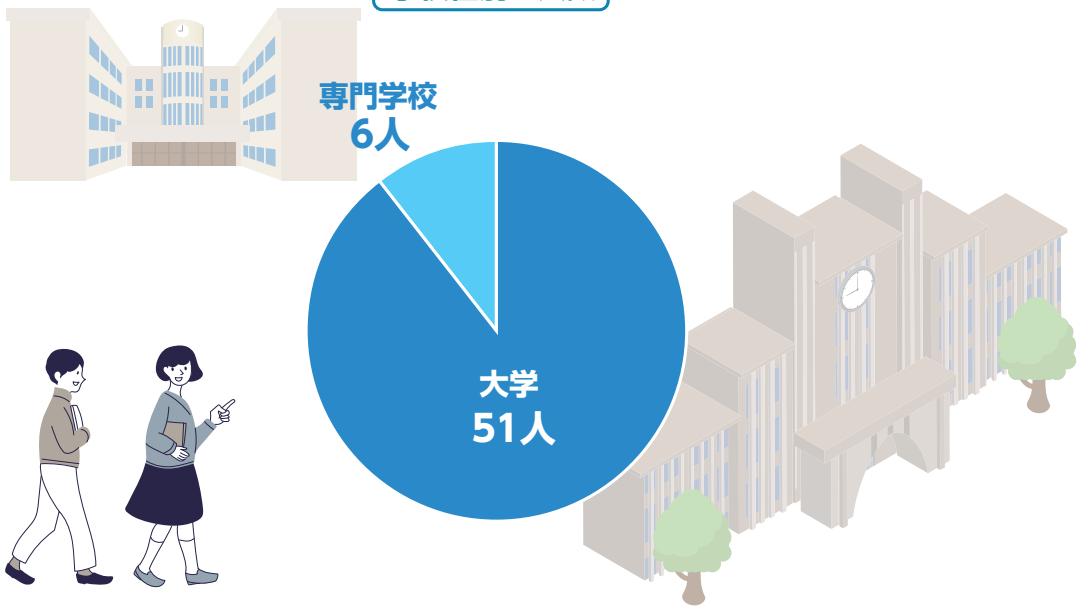
2023年度は新入生17人、在学生40人の計57人に総額1880万円を給付すると決定しました。在籍種別は大学51人、専門学校6人です。短大生はいませんでした。

専攻は「看護・医療」が最多の9人。以下、「福祉」8人、「教育・子ども」7人などと続きます。

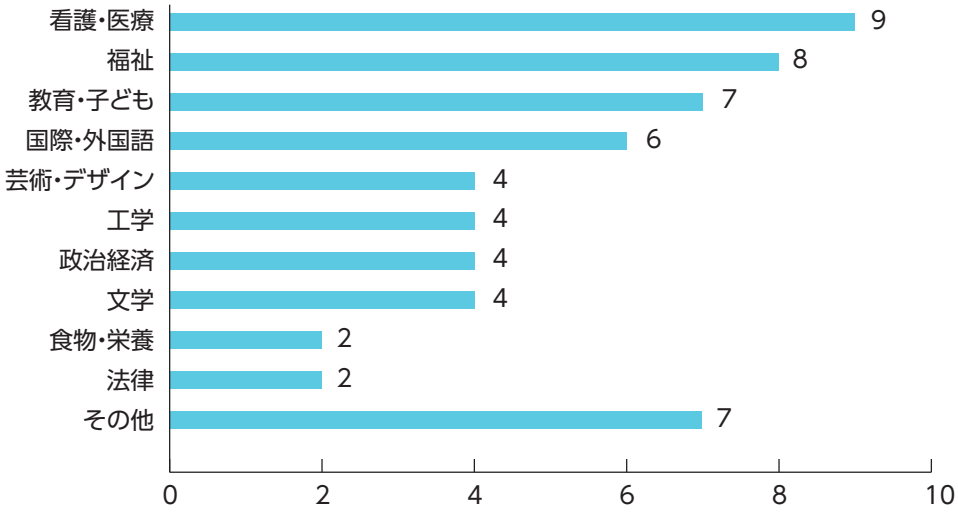
今春に卒業したのは17人。進路は金融（銀行）、食品開発、児童養護施設、大学院などとなっています。

このほか、ワーキングホリデー、体調不良等での休学が3人、中途退学が5人でした

学校種別と人数



専攻内容と人数



※人数などは2024年5月1日時点。なお、制度変更に伴い、給付は年2回に変更（これまでは年1回）。
24年3月に1025万円を送金済みで、9月に残る855万円を送金予定です

※朝日新聞厚生文化事業団の会計上の給付金の取り扱いは、2024年度分の支出としています

※進学応援金は、みなさまからのご寄付と山岡こども応援資金などを原資にしています

特集　私たちの新たな取り組み・その1

「施設や里親家庭で育ったからこそ、今、同じ環境にいる中高生らの力になれるはずだ」。応援生有志はそう考え、2023年度も新たなプロジェクトに取り組みました。ここでは、奨学金情報を発信する「Miomus（みおむす）」と、社会的養護からの巣立ちを迎える時期の子どもに様々なメッセージを届ける「すだちず」の二つのウェブサイトについて紹介します。

※応援生：進学応援金を受けている学生たち

奨学金検索サイト「Miomus」

きっかけは、応援生同士の話し合いでした。

里親家庭や施設の子どもたちは、経済的に厳しい状況におかれていることが少なくありません。それでも未来につながる学びを諦めたくない子どもにとって、奨学金は大きな支えになります。

その一方、「どこの団体がどのような奨学金を用意しているか」といった情報を集めることは容易でなく、多くの応援生は「里親さんや施設の職員さんが苦労して探してきてくれた」という経験を持っています。

官民含め、奨学金を給付している団体はいくつもあります。「それらの情報を簡単に探せるサイトがあれば、子どもはもちろん、里親さんや施設の職員さんの役にも立つのではないか」。そう考えた応援生のメンバーは有志を募り、プロジェクトを立ち上げました。

朝日新聞厚生文化事業団を始め、六つの団体が「子どもたちの未来を応援したい」と共感。全国の団体にも参加を呼びかけ、23年12月、奨学金検索サイト「Miomus」がスタートしました。

サイトは無料で使えます。奨学金や給付団体の名称を入力したり、給付型か貸与型か、年間いくらの支給を希望するか、どんな進路を望んでいるかといった条件を選んだりして検索。すると、それに合った奨学金情報が一覧できます。

それぞれの奨学金についてのページには、募集期間や申し込みに必要な書類など詳しい情報を掲載。給付団体の募集案内のページへのリンクも貼りました。

このほか、サイトには応援生らが執筆したコラムも掲載。奨学金を申し込む際に必要な作文を書くためのコツ、里親家庭や施設を離れて新生活を始める際に必要な転居費用などについて、わかりやすく解説しています。

「子どもにとっても、大人にとっても、努力が実を結びますように」との思いを込めて名付けられた「Miomus」。応援生や支える団体は、今後いっそう、サイトを充実させていこうと意気込んでいます。

https://www.miomus.net/

私たちの新たな取り組み・その2

未来を描く権利マップ すだちず

里親家庭や施設で暮らす子どもたちも、いつかは社会に巣立っていきます。かつて同じ状況で過ごした応援生の多くは「退所が近づくにつれ、先の見えない不安が募った」「将来に向けた情報が得られにくいことがあった」といった経験を共有しています。

親と離れ、経済的困難や寂しさ、生きづらさを抱えながらも未来に向かって歩んでいく後輩たちの力になりたい――。応援生有志はそう考え、「自立の準備」にフォーカスしたガイドの作成を企画。

当初は紙の冊子を作る予定でしたが、これをウェブサイトに発展させ、24年3月に公開しました。

プロジェクトには有志ら50人以上が参加。大学教授、施設の全国団体の幹部、弁護士らも制作委員に名を連ねています。サイトに掲載する情報については、生活環境、性別、家族の状況などにかかわらず役立つように、「権利」の視点を大切にしながら作りました。

トップ画面のメニューには「今の生活」「友達・人付き合い」「お金」「生い立ち・産みの親のこと」「つらかったこと」など12項目の気になること、知りたいことをイラスト付きで掲載。いずれかを選択すると、さらに個別のケースに関する情報の一覧が表示され、それぞれの気になること、知りたいことについて、応援生や専門家らがメッセージを寄せています。メッセージはサイト全体で約500にも及びます。

例えばメニューの「つらかったこと」を選択。すると「問題を起こしたから施設にいると思われた」「里親家庭で暮らしていることが、友達に分かってしまった」「不登校といじめ」などのケースが表示されます。

このうち「問題を起こしたから施設にいると思われた」を選ぶと、「信頼できる友人には、施設で暮らしていることを話している。ある友達に、『問題行動を起こしたから入ったんだろう』と言われた。一般家庭と同じように見られたい」といった高校生の悩みが記されています。これらの声は、応援生が後輩たちに寄り添い、ヒアリングするなどして集めたものです。

https://sudachizu.net/

こうした悩みに対し、複数の応援生が回答。児童養護施設出身の応援生は「その友達との関係性を見直すべきだと思います。自分のことを大切に思ってくれる友人と一緒にいた方が自分も相手を大切にできるし幸せだと思います」とアドバイス。

また、里親家庭とファミリーホームで過ごした経験のある応援生は「世の中の人は『児童養護施設』と『少年院』のイメージが混同していると思います。ひどい話ですよね。義務教育のなかで社会的養護に関することを学ぶような機会を与えてほしいですよね」と答えています。

サイトに関わる大人からも「かたよった見方をする人がいるのも事実で、（そうした状況は）私たち大人が作り出していると思います。少しでも本当の意味での理解者が増えるように、社会的養護の正しい情報をいろいろな人に知ってもらう活動を私もしていきます」などとメッセージを寄せています。

子どもたちの悩みや疑問、応援生らのメッセージは、文字で読めるだけでなく、音声でも聴けるように工夫しました。

サイトでは中高生や里親、施設職員らの意見、今後掲載してほしいことなども募集中。利用者の声を踏まえ、さらに内容をブラッシュアップしていきます。

とびだシート
TOBIDASHEET

「とびだシート」も作成!

「すだちず」の開設にあわせ、応援生ら制作委員はB5判のノート「とびだシート」も作りました。すだちずにアクセスするためのQRコードが記載してあり、里親家庭や施設で暮らす子どもたちが、将来のために考えたことや必要なことなどを書き留めることもできます。身近なところに置き、自立について考える際、里親や施設職員らと使ってほしいと考えています。

欄外には、ページごとに応援生らのメッセージを掲載。「1人で抱え込まないでくださいね。誰でもいいので頼ってください。頼ることを少しずつでもいいので練習してみてください」「全てのこどもに、周りから大切にされる権利と、自分を大切にする権利があることを知ってほしい」などと励ましています。

施設などで暮らす全国の中学3年生～高校3年生に配布しており、サイト経由で希望があれば、無料で送付。シートのデータはサイトからダウンロードすることも可能です。

2023年度　私たちのプロジェクト

施設や里親家庭で暮らす中高生らに役立つ情報を届けたいと、応援生は2023年度も様々な「ぴあ」（Peer=仲間）プロジェクトに取り組みました。同じような経験をしてきたからこそ、後輩たちに寄り添える。また、こうした企画を通じ、施設や里親家庭についての理解が社会に広がることも願っています。

ぴあ応援ラジオ

22年1月に開設したYouTubeチャンネル「ぴあ応援ラジオ」では、パーソナリティーを始めとしたスタッフを応援生有志が務めています。画面にはイラストなどを映し、パーソナリティーらの声だけが聞こえるラジオのような動画です。

23年度は、大学生活に必要なお金や、学業とアルバイトの両立など、学生生活のリアルを語り合う「学食トーーク」を公開。このほか、児童養護施設出身のシンガーソングライター松本哲也さん、楽天グループ株式会社常務執行役員チーフ・ウェルビーイング・オフィサー（CWO）の小林正忠さんをゲストに招き、それぞれの経験や考えを語ってもらう番組なども作りました。

https://www.youtube.com/@user-fz3ox8iq5u/videos

ぴあ応援ブック

応援生が編集を手掛けるぴあ応援ブックは23年3月に創刊されました。A4判カラーで8ページ。23年度末までに7冊を発行しています。24年冬号（24年1月発行）では、卒業の春を控え、施設や里親家庭を巣立つ前の備えや、その後の相談相手について解説。また、奨学金アドバイザー久米忠史さんにインタビューし、奨学金申し込み時の作文や面接のポイントなどついて話を聞いています。ブックは施設などに配られるほか、朝日新聞厚生文化事業団のサイトでも閲覧できます。

https://www.asahi-welfare.or.jp/archives/14825395

ぴあ応援フェス

初開催の22年度に続き、23年度にも「ぴあ応援フェス」を催しました。施設や里親家庭などで暮らす中高生らを対象に、応援生有志が中心となって10月14、15日にオンラインで実施。「気になる進学」「一人暮らし」などをテーマに、2日間で約50のプログラムを用意しました。

参加したのべ100人の中高生らは、自分が興味を持ったテーマのブースで、応援生の話に耳を傾けたり、質問したり。「世界を広げよう」がテーマのブースには、弁護士やデジタルクリエイター、大学准教授、厚生労働省職員らが登壇。「プロ」の仕事について語りました。

前回は事前に「フェスに参加したいが、施設や里親家庭にパソコンやスマホがない」といった声が上がりました。これを知った楽天モバイル株式会社が、期間中、無償でスマホを貸し出す協力をして下さいました。

進学情報シェアセミナー

応援生の多くが「奨学金の情報を集めるのが大変だった」と振り返ります。各種制度が整えられつつあるとはいえ、施設や里親家庭で暮らす子どもたちの進学率は、まだ相対的に低いのが現状。周囲に気軽に話を聞ける人がいないことが一因です。「ならばこちらから施設や里親の集いに出向き、情報を提供したり、質問を受けたりしよう」と始まったのがシェアセミナーです。

23年11月には応援生有志と奨学金アドバイザーの久米忠史さん、NPO 法人ひだまりの丘理事長の蛯沢光さんが、名古屋市里親会こどもピースを訪問。里親や児童相談所職員らを対象としたセミナーを開きました。24年2月には全国児童養護問題研究会神奈川支部のご協力で横浜市でも同様のセミナーを開催しています。

新応援生に決まった子どもたちの横顔

2023年度には新たに17人の新入生に進学応援金をおくると決まりました。その中から4人の横顔を紹介します。また、原資に充てるご寄付をいただいた方のメッセージも一部掲載いたします。

新応援生の声

Aさん　「困難超え進学目指す」

親による虐待が原因で、4歳から児童養護施設で暮らすAさん。困難を抱えつつ、中学では運動部の部長を務めました。高校でも副部長として活躍しましたが、怪我を負い、選手を断念。それでもマネージャーとして部を支えた努力家です。四年制大学への進学を目指しています。

Cさん　「信頼される社会人に」

高校1年で生徒会に加わり、体育大会を成功させたCさん。2年次にも参加しようと考えましたが、親からの虐待で児童相談所に保護されていたため、選挙に出られませんでした。教師らの配慮で活動を続けられたCさんは「信頼される社会人になりたい」と進学を希望しています。

Bさん　「本の魅力を伝えたい」

Bさんは2歳から児童養護施設で育ちました。小学校では長期休みに数日、実家に帰れることを楽しみにしていましたが、やがて母親とすれ違うようになり、折悪しく、支えだった祖父も他界。失意のBさんを慰めたのが読書でした。「本の魅力を伝えたい」と進学を望んでいます。

Dさん　「過去踏まえ声あげる」

Dさんには児童養護施設で過ごした時期があります。かわいそうという目で見られたことがあると振り返り、「自分の過去を否定されるようで苦しかった」。今は「そういう経験があるからこそ、後輩や社会に発信したいことがある」と考え、進学を楽しみにしています。

ご寄付いただいた方からのメッセージ

どんな子どもでも、どこで生まれても、夢を持って生きる権利があると思います。その夢を経済的な理由で諦めることがないよう、応援します。

経済的な理由を気にすることなく、誰もが将来の扉を開くことができるようになってほしいと思っています。頑張って下さい!

いろいろ困難もあるでしょう。直接会えなくても、みなさんを応援している大人はたくさんいます。負けないで、無理せず頑張って!

未来はあなたの前に広がっています。諦めないで、なんて気安く言えません。でも背中をほんの少し押せる大人になりたいと思っています。

陰ながら応援しています。みなさんが頑張っている様子を見ると、私もしっかりしようと勇気や元気をもらえます。ありがとう!

少しでも多くの学びを得ることは、何にも勝る財産です。背負った宿命を乗り越え、勉学によって幸福な運命を切り拓かれるよう願っています。

※メッセージは趣旨を損なわない範囲で一部編集しています

まなび応援金 子どもたちと施設

申し込んだ子どもたち、支える施設の方々の思いの一部を紹介します。

保育士の夢追いかける

父と父のパートナーに家を追い出され、ホームに入居しました。小学生の頃から子どもと関わる職業に憧れています。高校卒業後は専門学校で資格をとり、保育士になるのが夢。一度は諦めましたが、周りの応援も受け、再び夢を追っています。子どもや保護者に安心してもらえるような保育士になるため、精一杯学び、努力します。
（アイ・18歳）

孤独な人を支援したい

将来の目標は（悩みを抱える人たちを支援する）精神対話士になることです。孤独感や寂しさ、心の痛みを感じている人たちに寄り添い、支えたいと思っています。そのために、現在、志望校へ行けるよう勉学に励んでいます。もし、大学へ行くことができたなら、心理学を学び、臨床心理士の資格も取得したいと考えています。
（タクヤ・17歳）

衛生士で被虐待児支援

歯科衛生士になるのが目標です。虐待を受けた子どもたちの口腔保健の改善に力を注ぎたいと思っているからです。そのために、現在、歯科衛生士の国家資格を取得することができる大学への進学を目指し、勉強しています。
（サラ・17歳）

生活自立へお金が必要

実父から身体的虐待を受け、施設入所と家庭引き取りを繰り返してきた子どもがいます。「高校を出て自立すること」を目標に、新たな高校に編入。通学しながらアルバイトをする生活になります。ただ、現在ほとんど貯えがなく、高校卒業後の自立した生活に向け、なるべく多くのお金を必要としています。
（自立援助ホーム・ホーム長）

バイト減らして勉強を

教員になる夢を抱いている子どもがいます。家を離れ、自立援助ホームに入ったことで、弟や母親の面倒を見ることからも離れられました。結果的に学校の委員会や部活、バイトもできるようになりましたが、現在、受験を控えています。バイトを減らし、勉強に集中してほしいと考え、まなび応援金に応募しました。（自立援助ホーム・ホーム長）

※名前は仮名。年齢はメッセージ作成時点。今春の卒業生含む

の思い

高卒資格の取得目指す

20歳までに高校卒業資格を取得することが目標です。現在、朝早くに始まるアルバイトを続けつつ、高校に在籍し、単位取得のための勉強やレポートに取り組んでいます。将来の夢はまだはっきりと定まっていませんが、得意な絵をいかした仕事に就きたいと思っています。（イオ•18歳）

進学へ自主学習頑張る

生徒会の副会長に立候補し、高校全体が変わるように頑張りたいと考えています。学習面では、成績上位を維持するため、自主学習を大事にしています。大学に進むことを望んでいますが、福祉、法律、経済……とまだやりたいことが絞り切れていません。ただ、今までの恩返しとして、人の役に立つ職業に就くことを目指しています。（ハナ•15歳）

資格得て未来を広げる

国立大学への進学を目指し、日々高校生活を送っています。大学に進んだら、資格をいくつかとろうと思っています。これからの自分の人生に必要なこと、興味のあることを学び、知識を得て、将来につなげたいと考えているからです。そのため、高校生活でも様々なことにチャレンジし、視野を広げていきたいと思っています。（リオ•17歳）

進学の夢実現させたい

就労や精神面で不安定な両親に育てられた子どもがいます。妹を支える必要もあり、貧困に加え、ヤングケアラーになっていました。ホームへの入居により、生活や将来に安心感が生まれ、諦めかけていた大学進学も現実可能になっています。さらに前向きに暮らし、夢も実現できるよう、応援よろしくお願いします。（自立援助ホーム・ホーム長）

人生考えられる生活に

親によるネグレクト（育児放棄）を受けてきた子どもがいます。学校の先生が朝と昼のおにぎりを用意してくれ、夕食はレトルトで済ます日々。自立援助ホームへの入居が決まり、自分の人生をしっかりと考えて生きていけるようになりました。アルバイトの時間を減らし、大学進学の勉強をしてほしいと考えています。（自立援助ホーム・ホーム長）

自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金とは

まなび応援金は、自立援助ホームや子どもシェルターで暮らす子どもたちの就学・就労・自立を支えるプロジェクトです。朝日新聞厚生文化事業団が主催し、社会福祉法人カリヨン子どもセンターの協力のもと、2020年春にスタートしました。

様々な理由から親と生活することが難しい子どもたちについて、公的責任として社会的に養護・保護し、養育に困難を抱える家庭への支援を行うことを「社会的養護」といいます。現在、約4万2千人の子どもたちが社会的養護のもとに暮らしています。児童養護施設のほか、自立援助ホームや子どもシェルターなども社会的養護を担う施設です。

原則、自立援助ホームの利用者は15 ～ 20歳（状況により22歳まで）、子どもシェルターも義務教育を終えた15～20歳未満を想定しており、運営するのは社会福祉法人やNPO法人などです。

家庭内暴力や育児放棄などで傷つき、これらの施設にたどりついた子どもや若者の中には、経済的な事情によって中学校卒業や高校中退で社会に出る人も少なくありません。彼・彼女らが「まなび」を通じ、自分の未来を選び取る力を育んでほしいと願い、プロジェクトでは返済不要の2種類の助成（就学金・資格取得金）を行っています。

就学金　高校などで学ぶ努力を応援

- ●高校（全日制、定時制、通信制）などで学ぶための本人の努力を後押しすることが趣旨。
- ●4～9月を前期、10 ～3月を後期とする。
- ●6か月ごとに12万円を給付。返済不要。
- ●現在学校に在籍しているか、申し込み年の3月末に学校を卒業した人。
- ●国籍は問わない。

資格取得金　各種資格を取得する努力を応援

- ●自立に向けて各種資格を取得する努力を後押しするために費用の実費を給付する。
- ●資格取得に向けて必要な費用（授業料、教科書代、備品・交通費など）の実費を以下の基準で給付。
  - （ア）資格を取得できた場合は、かかった費用の全額（上限15万円）を給付。
  - （イ）資格を取得できなかった場合は、費用の7割（上限10万円）を給付。
- ●対象とする資格は公的機関が認定するもの、または運営委員会が制度の趣旨に鑑みて認めたもの。
  例：高卒程度認定試験、普通自動車免許、英語検定など。

対象となるのは、自立援助ホームや子どもシェルターで暮らしている方と、暮らした経験のある29歳までの方です。在籍・出身のホームを通じて集められる申し込みは、運営委員会によって審議されます。運営委員会は全国自立援助ホーム協議会、子どもシェルター全国ネットワーク会議、社会的養護出身者が運営する支援団体などによって構成されています。

2023年度前期　募集4～9月、内定通知10月、送金11月
2023年度後期　募集10 ～3月、内定通知4月、送金5月

2023年度の給付報告

まなび応援金運営委員会の審議の結果、2023年度には計578人に総額6357万9415円を給付しました。内訳は以下の通りです。応援金はみなさまのご寄付と朝日新聞厚生文化事業団が拠出しています。

※24年5月31日時点で手続き中を含む

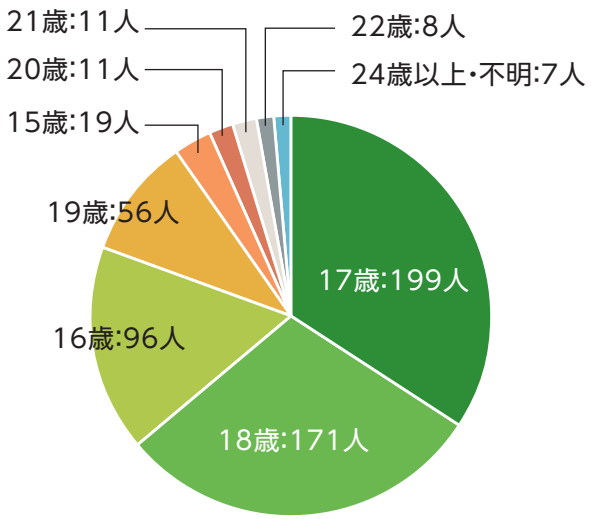
就学金

高校などに在籍する549人の子どもたちに対し、計5968万円の就学金を給付しました。在籍する学校は、高等学校全日制、定時制、高等専修学校です。

資格取得金

資格取得を目指す29人に対し、計389万9415円を給付しました。資格の内容は普通自動車免許、原付免許、日商簿記、電卓検定などです。

応援金を受け取った子どもたちの年齢は、17歳が34%（199人）と最も多く、未成年が5割強を占めています。まなび応援金の給付は、申し込みと同様、自立援助ホームや子どもシェルターを通じて行われ、施設から申込者に届けられます。施設と子どもたちには、応援金の使い道や生活状況などについて報告してもらっています。



まなび応援フォーラム

自立援助ホームや子どもシェルターで暮らす子どもたちを対象に、2023年9月9日、無料のオンラインイベント「まなび応援フォーラム～人生を選ぶ権利を実感できる社会へ～」が開かれました。不安を抱えた子どもたちに、応援金の存在を伝え、自らの将来に夢や希望を感じてほしいと、朝日新聞厚生文化事業団とカリヨン子どもセンターが主催。全国から40人の子どもや施設職員らが参加しました。

まずは主催者側が応援金について説明。その後、「自分の人生を自分で選んでいく力」と題し、応援金の利用経験者や施設職員らがパネルディスカッションしました。応援金が資格取得に役立った経験や、職員とどのように進路相談したかなどを説明。参加者からは「自分の人生を自分で決める機会を経て主体性が芽生えるという話に共感した」といった感想が寄せられました。

Interview

夢への一歩を支える応援金

子どもシェルター全国ネットワーク会議代表、
NPO法人ピピオ子どもセンター理事長、弁護士　鵜野一郎さん

（インタビュー・構成：河井　健）

親から虐待を受けるなどした子どもと若者の「緊急避難所」が子どもシェルターです。原則として義務教育を終えた15～20歳未満を対象に、入居期間はおおむね2カ月。入居者一人ひとりに担当弁護士がつき、様々な支援を行っています。NPOや社会福祉法人など約20団体が全国で運営。傷つけられた子どもや若者にとって、欠かせない「居場所」ですが、課題もあります。子どもシェルター全国ネットワーク会議代表で、自らもシェルターの運営に関わる鵜野一郎弁護士に現状をうかがいました。

緊急性を要する子どもたちの避難所というと、まず児童相談所（児相）の一時保護所が思い浮かびます。子どもシェルターは何が違うのでしょう?

一時保護所は児童福祉法に基づく施設です。対象は18歳未満の子どもたち。ただ、現実にはそれより上の年齢でも、親からの虐待などにより困難を抱え、行き場のない若者もいます。また、一時保護所のキャパシティーは、とりわけ15～18歳未満の子どもを受け入れるには十分ではありません。

こうしたいわば福祉の「すきま」にいる子どもや若者をすくいあげるのがシェルターなのです。日本では2004年、東京に初めて設けられました。

まだ20年前なのですね。その後、子どもや若者が抱える困難に取り組む弁護士や市民らの尽力で、施設が増えていったと聞いています。入居者には子ども担当弁護士（通称コタン）がつく、というのもほかの施設とは異なりますね。

はい。シェルターでは「子どもの権利擁護」を基本とし、子どもや若者の意志を確かめながら支援を進めます。入居者の相談に応じるなど、コタンはその手伝いをしています。

22年度施行の民法改正で、成人年齢は20歳から18歳に引き下げられました。ただ、それより下の子どもたちは親の強い親権のもとにある。虐待する親と交渉し、関係機関と調整するといった役割もコタンが担っています。

虐待件数は年々増加し、22年度に全国の児相が受けた相談は21万9170件（速報値、こども家庭庁）と過去最多を更新しました。

虐待したにも関わらず、引き離された子どもを捜し、連れ戻そうとする親もいます。子どもの安心・安全を確保するため、シェルターは民家を改装するなどして設けられ、どこにあるかわからないようになっています。

入居中は原則として、通学やアルバイト、一人での外出はできません。また、GPSの位置情報から居場所を割り出されるのを防ぐといった目的で、入居者の同意の上、スマートフォンも預かっています。

シェルターにはスタッフが24時間常駐し、一緒に食事したり学習支援を行ったりしています。おおむね2か月をめどとした入居中の費用は受け取っていません。

人材面でも費用面でも運営は大変そうです。

私が理事長を務めるNPO法人ピピオ子どもセンター（広島市）は2011年、女子向けの子どもシェルター「ピピオの家」を設立しました。ピピオとはラテン語で「ひな鳩」の意味です。24年4月1日時点で、15、16歳の計3人が入居。3人の常勤職員に加え、日中は10人ほどの登録ボランティアが、いずれもシフトを組んで寄り添っています。

運営費に関しては、国費を受けた市が一部を負担してくれています。ただ、十分とは言えません。年会費のある正会員や賛助会員、寄付を募るなどしてやりくりしています。

残念ながら、全国では閉鎖したり活動を休止してしまったりしたシェルターもあります。

「ピピオの家」の内部

シェルターを出た後、家庭復帰や児童養護施設などに移るほか、進学や復学、就労を目指す子どもや若者もいるとうかがいます。親との関係が安定せず、入居中のアルバイトが難しいとなると、学びや就職に役立つ資格取得のための費用工面は大変そうです。

ですから、返済不要の「まなび応援金」にはとても助けられています。まだ「ピピオの家」では給付を受けた入居者はいませんが、全国のシェルターで暮らす子どもや若者にとって、何かに挑戦し、学んでいく大きな後押しになっています。

入居者の中には、虐待を受け、大人に不信感を抱き、「生まれてこなければよかった」と自分を肯定できず苦しんでいる子どもや若者もいます。そうした入居者にとって、応援金は「支えてくれる大人もいるのだ」「自分は生きるに値する存在なのだ」「諦めていた夢に向かって一歩踏み出そう」と感じさせてくれるものでもあります。本当にありがたく、多くのみなさまに、ぜひ今後もご支援いただきたいと思っています。

近年、家に居場所をなくした子どもたちが、夜の繁華街などに集まり、事件や事故に巻き込まれるケースが相次ぎました。社会問題になったことから、こども家庭庁も24年度、10～ 20代を対象とした「こども若者シェルター」の創設に乗り出します。

子どもや若者のセーフティーネットは密なほうがいい。その意味で総論賛成です。ただ、私たちの子どもシェルターとどこが違い、すみわけが必要なのかなど、まだよくわからないことも多い。述べたように、シェルターの運営は大変です。一人ひとりにマッチした支援が受けられるようにすることも重要。乱立は望ましくないと感じています。

いずれにせよ、こうした動きをきっかけに、避難所を必要とする子どもや若者への理解が深まり、社会全体で支えていけるようになることを願っています。

Message

まなび応援金
ご支援いただいた方からのメッセージ

頑張りすぎず、ときには休みながら、遊びながら、前へ進んで下さい。辛い思い出を楽しい思い出で塗りつぶす人生を！

努力は実ります。若い方を応援できる機会を下さってありがとうございます。より良い社会を残すお手伝いをさせて下さい。

子どもを持つ親として、すべての子どもの未来の可能性を信じ、応援したいです。私も頑張ります。一緒に頑張りましょう！

児童相談の仕事をしています。このプロジェクトに参加し、少し子どもの役に立てている気がします。ありがとうございます。

みなさんが未来を拓いていけますように。そう願いつつ、ささやかではありますが、応援いたします。幸せを見つけて下さいね。

子どもの夢と希望を叶える取り組みに賛同します。未来に希望を持ち、新しい世界をつくっていける人が一人でも育てば嬉しいです。

※メッセージは趣旨を損なわない範囲で一部編集しています

災害時こども福祉応援金①

能登半島地震の子ども支援

2024年1月1日、最大震度7の大地震が石川県の能登半島を襲いました。家屋の倒壊やインフラの寸断、火災など甚大な被害が発生。現地ではその後も不自由な生活を強いられている人たちがいます。朝日新聞厚生文化事業団は発生ほどなく、施設や里親家庭などで暮らしている子どもたちを支えようと、「災害時こども福祉応援金」への寄付呼びかけをスタート。3月末の締め切りまでに、当初目標とした100万円を大幅に上回る190万円（130件）の寄付が寄せられました。被災した子どもたちの支援のため、大切に活用してまいります。

大規模火災があった石川県の「輪島朝市」周辺。　朝日新聞社提供

呼びかけはクラウドファンディングサイトREADYFORを通じて実施。寄せられたお金は、全国里親会、日本ファミリーホーム協議会、全国子ども家庭養育支援研究会とも連携し、支援金や物資支援、専門家の派遣、グリーフ（悲嘆）ケアの費用などとして活用してまいります。

朝日新聞厚生文化事業団の前身は、関東大震災（1923年）の救援活動などをきっかけに誕生しました。2011年の東日本大震災でも、両親を亡くした子どもたちに支援金を送ったり、グリーフケアのプログラムなどを実施したりしています。

今回も連携機関と話し合い、独自の活動や、必要な活動を行っている他団体への助成金などに寄付金を充てていきます。まずは3月11日付で、能登半島の七つの里親家庭に、それぞれ10万円の応援金を送りました。

呼びかけを始めた直後から、多数の寄付が寄せられました。希望する寄付者のお名前と市区町村、寄付額は、居住地域の朝日新聞地域面に掲載。多くの善意を紙面で紹介させていただきました。

また、READYFORには数多くの激励コメントもいただきました。「少しでもお役に立てればと思います」「子ども達に笑顔が増えますように。応援しています」「大変な状況の中頑張っている子どもたちに少しでも安心と温かさが届きますように」……。

被災地の復興はこれからです。天災により、困難を抱えた子どもたちの未来が閉ざされることのないように――。みなさまの温かいお気持ちに深く感謝し、これからも息の長い支援を続けてまいります。活動内容については逐次、READYFORや朝日新聞厚生文化事業団のウェブサイトなどで報告していきます。

九州・東北の豪雨で活用

列島に梅雨前線が停滞した2023年7月、九州北部（7～ 10日）や東北北部（14 ～ 16日）などは豪雨に見舞われました。とりわけ秋田県では、この間の総降水量が多いところで400ミリを超える記録的な大雨を観測。各地で河川の氾濫や土砂災害、住宅の浸水といった被害が出ました。

東日本大震災などの教訓から、朝日新聞厚生文化事業団は21年8月、災害時こども福祉応援金を設立。進学応援金、まなび応援金と並ぶ「こども応援金」の一つと位置づけ、自然災害で被災した里親家庭やファミリーホーム（小規模住居型児童養育事業）で暮らす子どもたちを迅速に支援する取り組みを続けています。

23年の豪雨では、秋田県内で2軒の里親家庭が床上浸水。当時、それぞれ幼稚園児と小学生の児童が暮らしており、一日も早く安心を取り戻してほしいと、各家庭に30万円の生活給付金を送りました。

自然災害は「いつ、どこで、どのように」発生するかわかりません。いざという時、被災した子どもたちに素早く支援を届けられるよう、平時から体制を整えておく必要があります。

このため、災害時こども福祉応援金の設立にあたっては、21年7月、全国子ども家庭養育支援研究会と朝日新聞厚生文化事業団で基本協定を締結。研究会は全国里親会、日本ファミリーホーム協議会、全国児童家庭支援センター協議会が協力して20年8月に立ち上げたものです。

被災者支援に充てられるお金は、クラウドファンディングサイトREADYFORなどを通じてみなさまから寄せられた寄付金が原資。温かいご支援に改めて感謝し、天災への備えを怠らず、機動的な支援を続けてまいります。

未来をひらく こども応援金

こども応援金　その他の応援実績

朝日新聞厚生文化事業団は近年、困難な状況にある子どもたちへの各種応援金に力を入れています。08年度以来の応援金給付総額は約9億円。みなさまのご寄付とチャリティーの収益を原資に、以下のような取り組みも続けてきました。

◆新型コロナウイルス緊急学生応援金

コロナ禍での学業を支援するため、児童養護施設などを巣立ち、大学などで学んでいる1400人超の学生に1人当たり5万円を給付。

◆東日本大震災こども応援金

震災で両親を亡くした子ども202人に対し、年齢に応じて150万～ 300万円を給付。

みなさまの応援を力に

児童養護施設・里親家庭等進学応援金を受けて大学で音楽を学ぶ林陽菜さん（ピアノ）。2024年3月23日、東京都中央区の浜離宮朝日ホールで開かれたバイオリニスト川畠成道さんのコンサートのプレプログラムに出演。

◆児童養護施設・里親家庭等進学応援金

主催：朝日新聞厚生文化事業団、協賛：公益財団法人 原田積善会

◆自立援助ホーム・子どもシェルターまなび応援金

協力：社会福祉法人 カリヨン子どもセンター
協賛：公益財団法人 原田積善会

◆災害時こども福祉応援金

主催：朝日新聞厚生文化事業団
協力：全国子ども家庭養育支援研究会
後援：公益財団法人全国里親会、日本ファミリーホーム協議会、
全国児童家庭支援センター協議会

2023年度
こども応援金　事業報告書

2024年6月17日発行
発行者　社会福祉法人朝日新聞厚生文化事業団
執筆協力　河井 健
デザイン・イラスト　かえるぐみ

社会福祉法人
朝日新聞厚生文化事業団

本部（東京）
〒104-8011　東京都中央区築地5−3−2
TEL 03-5540-7446　FAX 03-5565 - 1643

大阪事務所
〒530-8211　大阪市北区中之島2−3−18
TEL 06-6201-8008　FAX 06-6231-3004